



事務所のあるミナミを闊歩する學さん。「隣はラブホテル、向かいはSMクラブ。ネオンがギラギラした俗っぽい所でないとアカンのや」 望月亮一撮影



細密な線で描かれた  
「天妖」の女たち  
川平愛撮影

写真集「瀧」<sup>こう</sup>を手掛けることになった2ヵ月後、旧知の絵師、東學さん(55)からマリさん(築山万里子さん)に「こんな仕事あんねんけど、やりたい?」と説得があった。何をどうするのかもわからなかったが、「やる」と即答した。それが墨画集「天妖」だった。

アサヒ精版印刷を取り巻くクリエーターーやアーティストの中でも、指折りのクセ者。トレードマークの作務衣姿、独特の髪形にギヨロリとした目、太い腕。アウトローのにおいが立ちこめていて取っつきにくそうな印象を受けるが、笑うとちゃめっけにあふれる目になる。

そんな學さんが描くのは「女」。ずっとそうだ。最近は女を描くのではなく、女に描いているのだが、それは置いといで。纖細な墨の線で描き出す學さんの「女」は独特だ。眉毛も黒目もない。無表情な白い顔。本人いわく「何考えてんのかわからない、生きてるか死んでるかもわからへん」。それでいて、画面に描き込まれた鬼やコウモリ、ムカデなどの恐ろしい目をした妖怪変化が、どろどろした情念を表す。そして漂うエロス。とても新聞には載せられない姿態もある。天女でもない、妖怪でもない。その間を取って「天妖」。

江戸時代の浮世絵師は、春画で一本一本描く女性の下の毛が腕の見せどころだったともいう。数年前、パリで北斎の肉筆春画が発見されたという週刊誌の記事で、研究者が下の毛の細緻な描写を褒めていたのを思い出した。學さんの細密な線と、絵師という名乗りに、通じるものを感じる。

だからこそ、本人が言うように「僕の絵は線が細かいから、再現すんの難しい」のだ。そんな仕事を受けてくれる印刷会社は、アサヒ精版しかなかった。マリさんは早速、難題に直面する。學さんの細かい線を印刷するために、版

# ビンチに「捨う紙」あり

元のPARCO出版が「100年以上残る本にしたい」と和紙を使おうと提案。このあたりの経緯を學さんが思い返すには「普段は安い中国製の和紙を使ってる。一度、1枚1万5000円の和紙を使ってみたら描きにくいのなんの。俺には安い和紙が合ってるのに、どんどんえらいことになって」。福井の和紙工場に特注することになったのだ。ところが……。

「和紙は普通、表がツルッ、裏がザラッとしてるでしょ。でも糸かかりで製本するには紙の両面に印刷しなければならず、表裏が同じ質感でないと製本は無理ー」。当時を思い出したのか、マリさんが身をよじらせる。突破口はなかなか見いだせなかつたが、捨てる神あれば拾う神あり。マリさんには「捨う紙」が付いていた。

「そしたら紙屋さんが『合紙してみましょか』と言うてくれたんですよ!」。合紙とは、紙を貼り合わせること。この場合、合紙することで両面ツルッとした和紙ができたのだ。「合紙はしそっちゅうやってましたけど、和紙ができるとは思わなかつた。それで光が見えて」

「東學作品集」と名付けられた特製和紙。合紙した紙は作品を印刷し、薄い紙には學さんの名前を透かしで入れることになった。紙のどこに透かしを入れるかの指示は、プリントイングディレクターのマリさんの仕事。少しでもずれたらあかんので「一番緊張した」という。断裁、製本の工程を計算して、あらかじめ透かしの場所を決めなければならない。紙の端からのサイズをきっちり決め、「1ミリも狂わないように、設計図を作つて紙屋さんに発注しました」。

聞いているだけで気が遠くなる作業だ。そう感想を漏らすと「どうしようってことが、毎回出てくるんです」とマリさんが屈託なく笑う。どうしよう、ってことは、まだあった。